

全国遠洋まぐろ地域漁業復興プロジェクト

宮城県気仙沼市

事業実施者：一般社団法人全国遠洋かつお・まぐろ漁業者協会
事業期間：平成25年11月11日～平成28年11月10日

使用船舶名：第七福洋丸(436トン)
(遠洋まぐろはえ縄漁業)

(取組の内容)

- 年2航海操業の実施：航海日数を短縮し、また漁場間の往復航海で回航員を活用することで、乗組員の休暇の拡大(約10～20日間の増加)を図る。
- 甲板上的労働環境の改善：船首楼甲板に熱反射塗料を採用し、作業甲板上にドライミスト噴霧装置・送風ファンを設置することで労働環境の改善を図る。
- 居住区的生活環境の改善：船室居住空間の拡大(1人当たりの寝室床面積を従来船比2.5倍)、プライベート空間の確保、トイレ・シャワー・洗面台の増設を行い、また船内複数箇所で利用可能なインターネット設備を整備する。
- 省エネ漁船の導入、省エネ運航の徹底、次世代型冷凍システム搭載による冷媒充填費と燃油使用量の削減(被代船比15%)
- 漁獲物の品質向上：マホービン魚艙を導入するとともに、低反発マットと電気ショッカーを使用することで、作業甲板上の漁獲物の処理の迅速化及び打たれ(皮下出血)・シミ(血栓)の軽減を図る。
- 漁獲物の付加価値向上：漁獲物の一部を地元気仙沼港で水揚げするとともに、缶詰加工、未利用部位の利用拡大を図る。



第七福洋丸

(事業の成果)

- 水揚量は、初年度は冷凍機の故障により操業日数が大きく減少したため計画447トンに対し264トン(比較増減0.59)と落ち込んだ。2～3年度はパプア・ニューギニアEEZ内操業を実施し、2年度553トン(同1.24)、3年度589トン(同1.32)と計画を上回る水揚げ実績となった。
- 初年度の冷凍機の故障や漁模様による増減はあったが、3ヶ年平均の計画対比で航海日数は25日間の減少、乗組員の休暇日数は7日間の増加となった。
- 改革型漁船の導入により、高温・多湿な熱帯域における甲板上的労働環境が大幅に改善したほか、トイレ等の混雑が解消される等、従来より快適な船内生活が可能になった。
- 船内機器の故障による負荷の増大、好漁のため操業効率を高める必要性が生じたことから、燃油消費量は3ヶ年平均の計画対比で172.79KL/年の増加となった。
- 漁獲物の品質が買受人より高い評価を受け、3ヶ年平均の計画対比で販売単価が12.4円/kg向上した。
- 3年度事業でメカジキ他9.55トンを経験船で水揚げし、またビンナガ0.72トンを経験船加工用に販売した。未利用部位は、3ヶ年合計で3,151.8kg(682,490円)販売した。
- 3年度事業で南東北フードネット(平成28年10月)に参加してビンナガの缶詰の販促活動、気仙沼メカジキブランド化推進委員会(平成28年10月)でマスコミ各社を通じた普及活動を行った。
- 冷凍機の故障のあった初年度を除いた2～3年度の平均償却前利益は74.6百万円となり、次世代船建造の見通しが成立する収支状況となった。